「元通り」ではなく「新しい社会」を

園長　野中　泉

「今ずっと考えていることがあるんです」そう言って、電話をかけてきてくれた友人が、こんな話を始めました。「感染拡大の防止で自粛する理由って、２つあると思うんです。A 実際に感染を拡大させたくない（より正確には、医療崩壊をおこすような感染拡大をしない）B 社会的な目を気にせざるを得ない。誰しも社会的な存在である以上、B もとても大事なことです。でも、究極のゼロリスクを主張する人たちに合わせていると、ここから先もほぼすべての社会的な関係は打ち切ることになってしまう。だとすると、私たちは、医学的解除基準とは別に新しい社会の解除基準を作らないといけないんじゃないか。そんなことを考えていたんです」。こんな話になったきっかけは、私がアトムの懇談会の再開を彼に伝えたからでした。

「懇談会を再開しよう」。クラスのリーダー保育士会議で、そう決めたのは、大阪の緊急事態宣言期間解除直後の５月の終わりのことです。世間的には「集う」ことに、まだまだ慎重な意見も多いことは重々承知していましたが、会議冒頭から、通常保育再開と同時の懇談会再開に否定的な保育士は誰もいませんでした。「今だからこそ、保護者と話したい」「まだ、担任の自己紹介もできていない」という声は、この自粛期間中、不安と葛藤を抱えながらふんばって保育を続けてきた保育士たちの切実な心境だと感じました。ひとりでもふたりでも話したい人のためにやる意味があるのではないか、三密を避けて、どうにか開催できる工夫はないかと、真剣に話し合う保育士たちの姿に、改めてアトムの懇談会が、保護者の子育てを支える場であると同時に、アトムの保育士たちの保育を支えるためにも必要不可欠な場であったのだと気づかされます。

冒頭の友人は続けてこんなふうに言いました「感染拡大防止でソーシャルディスタンスをとらないといけない。でも、これを続けていると、ほんとうにまずいことになるような気がするんですよね。コロナに対抗するワクチンと特効薬（タミフルみたいなもん）が開発されて、コロナが普通の病気になるまでに何年もかかると専門家は言っている。そしたら、その間中、子どもは人と濃密に関わらないでいくのかってことですよね。隣の子が消しゴム落としても、ひろってあげちゃいけないと、小学校の先生が指導しているという話を聞くと、これは、まじで、やばいと思うんですよ」。長年、子どもが遊びの中で育ちあう姿とそれを保障する社会の問題に真摯に向き合ってきた友人の苦悩は、そのまま、この時代に子どもと関わる大人全員の苦悩です。なぜなら、感染拡大防止の観点から三密のリスクを学んだのと同じだけ、子どもが他の子どもたちと三密で関われないとしたら、育ちの問題として大きなリスクがあることも、私たちは知ってしまっているからです。「WITH　コロナ」。いわゆる自粛期間があけてから、メディアから頻繁に聞こえてくるようになった言葉ですが、コロナ以前の「元通り」を目指すのではなく、コロナとつきあいながらの「新しい社会のありよう」を考えなければいけないという『難しい宿題』を、私たちが抱えていることは、どうやら間違いなさそうです。

みかん組の懇談会で７月の「お泊り保育」もどうにか工夫してやりたいと担任が説明した後、ひとりの保護者がこんな感想をくれました。「やめる選択をする方が簡単なのに、ありがたい気持ちでいっぱいです。園が（先生方が）、私の子どもに本気で向き合ってくれているからこそ、私も園や子どものためにできることがあればと思っています」。

懇談会初日、本当に久しぶりに保護者と保育士が車座に座る光景を目にした瞬間、おおげさではなく込みあげるものがありました。全員のマスク姿も、座布団の間隔をあける工夫も、それでも集い語り合いたいと願う気持ちの表れのようで温かいと感じたのは、私だけでしょうか。コロナが出した難しい宿題をどう考えればよいのか、私にはまだわかりません。でも、これから先も、アトムで起こるひとつひとつのことは、子どもを真ん中にしながら保護者と一緒に考えあうその先に答えがあると、それだけは、はっきりとわかっています。